

栄光

説教

『祈ってください』

ヨブ記47章7節～11節
ローマの信徒への手紙15章22節～33節

上野峻一

| | |
|-----------------------------------|---|
| 説教…………… | 1 |
| 特集・「聖書との 出会い」………… | 2 |
| バンコクだより… | 5 |
| 追悼・ 河原重恵姉…… | 6 |
| 書評「僕は、そし て僕たちはどう生き るか」…………… | 6 |
| 牧師のメモ帳…… | 7 |
| 牧師の書齋から… | 7 |
| 長老のファイル… | 8 |

「祈ってください」。この御言葉

に向き合う時、私たちは、主イエ

ス・キリストを信じる信仰者とし

て、また一人の人間として、深く

自分自身を見つめ、神と共にある

生き方を問われます。「祈り」とは、

主なる神さまとの対話です。決して

独り言ではありません。一人で

祈る時も、皆で一緒に祈る時も、

いつも思いと言葉は主なる神さま

へと向かいます。つまり、私たち

が祈れなくなってしまう時、また

祈ることを忘れてしまう時、そこ

には神さまとの関係における何か

しらの問題が生じています。

ローマの信徒への手紙第15章30

節「兄弟たち、わたしたちの主イ

エス・キリストによって、また、

霊が与えてくださる愛によってお

願います。どうか、わたしのた

めに、わたしと一緒に神に熱心に

祈ってください」。この「お願い

します」という言葉は、元々のギ

リシャ語では「強くお勧めします」

という意味があります。最後に記

されたパウロの切実な願い、最も

重要なお勧めです。

この祈りは、今のパウロにとつ

て、実に具体的な事柄です。その

課題を共有して、自分だけではな

く、一緒に祈ってくださいと言っ

のです。それは、相手に「祈って

ください」と一方的に頼むのでは

なく、悩みや不安を前にして、「祈

りましょう」と、共に祈ることを

呼びかける言葉です。これが、教

会にとって、キリスト者として必

要なことです。献金や奉仕、あら

ゆる活動に先立つ、教会の信仰を

根底から支える私たちのなすべき

業です。なぜなら、祈りは、主なる神さまへの確かな信頼に基づくものだからです。

その中で、決して忘れてはならないことがあります。それは、このような共に祈る教会につながる一人ひとりであっても、私たちは弱く、もろい存在であるということです。すぐに誘惑や試みに負け

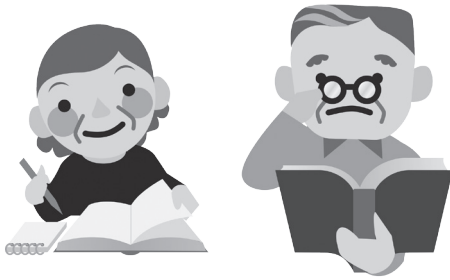
てしまう欠けの多い器です。祈りによって気つかされるのは、主なる神さまに正しく向き合うことのできない罪人の姿です。しかし、だからこそ、私たちに主イエス・キリストの救いが与えられました。一人では立ち上がることのできない者を立たせ、次はその者が他の誰かを励まし、支え、力づけるようにと、主イエスは、十字架へと至る受難の道を進まれました。

主イエスは、弟子のペトロに語られました。「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22・32)。この御言葉を語られた主イエスの祈りは、私たち一人ひとりを支えます。そ

して、この祈りによって信仰が強められ、立ち直った者が同じように、弱さやもろさを感じ、罪に苦しみ、祈れない者たちに、主イエスによって祈られていることを、神の愛のうちにあることを伝えていくのです。それが、先に福音を知らされ、主イエスを救い主と信じ受け入れた者の使命です。

経堂北教会での3年間の歩みを通して、私は主の多く豊かな恵みのうちに過ごせたことを感謝しています。これまでたくさんの方の祈りによって励まされ支えられ、力づけられてきました。伝道者が福音を語り続けることは、祈りなくしてはできません。私たちの業として教会と伝道のための第一は、主なる神への祈りです。どうか、神に熱心に祈ってください。わたしのために、教会と伝道者のために、そして、まだ福音を知らない愛する人のために、わたしと一緒に祈り続けましょう。主イエス・キリストにあつて、どこにあつても主の教会は一つです。平和の源である神があなたがた一同と共におられるように。

アーメン。



聖書との出会い



新学期や新年度を迎える4月。

春を迎え、気持ちも何となく明るく前向きになります。キリスト教主義の学校に入学して初めて聖書を開いたという方もいると思います。

聖書とどんなふうに出会い、つきあって来たのでしょうか。



聖書と讃美歌

遠藤路得子

牧師の家に生まれたのだが、聖書との出会いを改めて考えると、いつも側にあっただけかと思うが通して読んではいない。教会に住んでいたから、日曜日は早くから起こされ、礼拝に出席させられた。話は分ならず、ただ讃美歌だけは大きな声で歌っていた。他の集会等で聖書の輪読をさせられたが、これほど嫌な事はなかった。難しく読みにくかった。小学生の頃、マタイ伝(その頃の聖書はそうだった)を始めから張り切って読もうとするが、カタカナの名前の連続で、その時点でほうり出してしまっていた。教会説教で聖書を分かりやすく解きあかすお話に出合ったのは、北教会に来るようになって初めてだった。その上、聖歌隊に入らせてもらい、私にとっては讃美歌こそ、聖書との出会いと思う。子供の頃から「うたの声は 小さ

くても よろこびなざる神様」と大きな声で歌っていた。

牧師である父から、幼稚園で旧約聖書物語を話してもらったり、中学生の時は聖書の時間の先生として教えてもらっていた。成績も悪い方ではなかったと思うが…。

現在は日曜日の説教も、私が分かるだけ書き止める事にしていく。後で読みかえすわけではなく、恥ずかしながら身につけているわけではない。今になって思うが、人からは話が上手だったと言われるていた父の話がちゃんと聞けなかった事は悔いている。

何年前か合唱で、「イザヤの予言」(高田三郎作曲・指揮)に参加した。高田先生の合唱の教えは、聖書を歌う事の大切さ、歌う時の気持等、大変きびしいものだった。しかしそれは楽しい思い出である。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」(マタイ11・28、29) この合唱曲は特に熱心に指導を受けたのがとても良かったと思っている。

わたしの聖書との出会い

榊原温子

私は両親共、祖父母の代からの3代目クリスマスチャンですが、幼児洗礼は受けていません。狛江駅前に住んでいた祖父は、時折、村田正亮牧師を招いて家庭集会を開いていました。また、クリスマスには大きなクリスマスツリーを飾って、近所の子供たちや私たち姉妹を招いて讃美歌を歌い、自らサンタクロースに変身してプレゼントを手渡して祝ってくれました。

父の勤めが月曜公休であったため、教会にはいつも母が連れて行ってくれました。日曜学校では、イエス様のお話を聞き、楽しい時を過ごし、聖句の書かれたきれいなカードを貰うのを毎回楽しみに通いました。

高校時代、それまで祖父母と同居していた叔父の転勤のため、私の家族が祖父母と同居して、経堂北教会の高校生クラス「初穂会」

に出席し、聖書に親しむようになりました。修養会などの教会行事には毎回参加して、楽しかったことを思い出します。祖父所蔵の世界文学全集を端から読む内に、『クオ・ヴァデイス』が聖書の中の言葉で、文学、音楽等は、聖書が深く関わっていることを知りました。

高校2年の時、祖父が天に召され、私の心に洗礼を真剣に考え、きつかけが与えられ、その年のクリスマスに村田牧師から洗礼を授けられました。祖母から新しい聖書を頂き、「旧約聖書は物語のようで面白いから」と聖書の通読を勧められました。ところが、今でも心に深く残っています。

上野先生が伝道師として赴任されてからの3年間、聖書研究祈禱会で旧約聖書イザヤ書全章を学ぶことができました。初めて聖書に親近感を覚ええました。輪読も楽しみでした。「主の祈り」の後、全員でお茶を頂きながらの談笑の時は、牧師をはじめ、皆さんと近しくなれる良き交わりの場に置かれていることに感謝です。これからも入門講座をはじめ、聖書や教理について学んでいきたいと思っています。

やはり永遠のベストセラー

國田あつ子

教会の図書委員会では、年に2回礼拝後、教会員の方に、お読みになって興味深く皆様にも紹介頂きたい本について、お話を聞き、お聞きする小さな会を催しています。私は毎回参加できるわけではないのですが、出席するたびにご紹介される本を通して新しい世界が開かれます。自分ひとりでは手に取らなかつたであろうと思う本に注目することもできる感謝のときです。

本を読むとき、「初めに言があつた。言は神と共にあつた。…」というヨハネ福音書が頭に浮かびます。聖書の中の言葉は不思議です。いろいろな場面であつと心に浮かび、心を鎮め、励ましてくれます。これはクリスマスチャンの特権でしょうか。

受洗して間もなく、日々聖書とどのように向きあうかを考えていたとき、経堂北教会に「デイボー

ションの会」という、比較的新しい社会人の教会員で構成された聖書の学びと祈りの会があり、私も参加していました。旧約から始まる聖書の世界や歴史を深く学ぶことが出来る貴重な会でした。教会員以外の方々もいて、自分の生活環境とは異なる出会いもありました。その会では、聖書について一人ひとりが疑問に思ったことや感じたことなどをそれぞれ語りあい、四竈揚牧師の熱心な指導にも支えられ学びました。会の終わりにはそれぞれが自分の言葉で祈り、全員で祈りを合わせました。日々聖書にむかいあうこと、祈ることの大切さが養われたと思っています。

といつても日々反省することは、かりで、到底、優等生にはなれない私ですが、「…気をつけて、目を覚ましていなさい…」と聖書は教えてくれます。「…神は真実な方です…試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」と支えてくれるのです。何回読んでも、その度に新しい！私が出会った聖書は、やはり永遠のベストセラーです。

暗唱聖句

山崎恵葉

私の通っていた中学校では、毎朝の礼拝の中で暗唱聖句を唱えていました。聖句の箇所は毎週変わります。月曜日の礼拝で「今週の暗唱聖句は…」とアナウンスがあり、それに続いて全校生徒が一斉に聖句を唱えます。不思議なもので、どんなに長い聖句でも、周りの声に合わせて唱えているうちに、週の終わりの金曜日には何とか覚えられてしまうのです。

中学、高校の6年間で、かなりの数の聖句を覚えたことになりましたが、残念ながらすべてをそらんじられるわけではありません。今でも記憶に残っている聖句には、マタイ22章の「最も重要な掟」、1コリント13章の「愛」について、フィリピ2章の「キリストのへりくだり」などがあります。それらは、日常のふとした瞬間に、頭に浮かんでくることがあります。当

時は、ひたすら覚えることしか考えていませんでしたが、20年以上を経て、生きた言葉として自分に語りかけ、日々の歩みの上で大粒な糧となつていきます。

聖書の言葉は、すぐには理解できず、疑問に思ったり、不思議だと感じたりすることがあります。分からなくても、何度も繰り返し返して、さらに説教や聖書の学びを重ねることで、すっと心に届く瞬間があります。初めは難しいと感じた箇所ほど、かえって印象深いものです。

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ」。コヘレト12章のこの言葉は、中学校に入学した当初に覚えた聖句です。いま、私は一人の娘を育てる母として、娘と一緒に聖書を開くことがあります。私自身が若い日に神さまに出会わせていただいたように、娘にも聖書を通して神さまが語りかけてくださいますようにと祈っています。

聖書のそばで

重藤優子

私の聖書との出会いは、幼児の頃に与えられた聖書物語の絵本たちでした。

私の一番のお気に入りには、回心したサウロが命を狙われ、ダマスコの城壁から籠で吊るされ脱出する箇所を描いた一冊でした。何ともモダンな絵のタッチで、危機迫るダマスコの夜空はシヨッキンゲンピンクで表現されていました。何というセンスでしょう！ その絵を見るたび、エキサイティングな気持ちになり、弟を籠に入れて寸劇を強いるわ、吊つてみようとしてひっくり返し大泣きされるわ、非常に迷惑な姉であったと反省しております。

10歳の頃、祖父から「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝」、しと、ロマ、コリント、ガラテヤしょ」と(鉄道唱歌のメロディーで)順に歌っていけば、頁が書かれてい

なくても、箇所名からあたりをつけて聖書が開けるという仕組みを教わり、とても大人になった気分がしました。その時「そう、しゅつ、レビ、みん、しんめいきー」という旧約ソングまで一気に教えて欲しいと迫った記憶があります。聖書を愛おしく身近なものと感じた出来事でした。

例の籠で吊るされた弟の宏樹は、現在断捨離の達人で、その掃除テクニクは尊敬に値します。彼は父方の祖母の他界をきっかけに、実家の断捨離を敢行しました。その時事件は起きたのです。彼は、今はもう誰も開くことのなくなった何冊もの口語訳聖書を、こともあろうに処分しようとしていました。家中大激論となり、「聖書とは」について本気で話す機会となりました。この世の業が終わるとき、私たちは物質的なものを何も持つては行けません。しかしとにかく、口語訳聖書たちは断捨離リストから外されることとなりました。

聖書との出会いからを思い返すと、このようなエピソードばかりですが、これからも持ち続けることが許されますようにと祈ります。

バンコクだより

2016年11月から4ヶ月間、勤めている会社の仕事でタイのバンコクに出張してきました。短い滞在ではありましたが、その間の様子を少し書かせていただきます。

タイ王国では、昨年10月に70年間在位していたプーミポン王が崩御されたところでした。タイの国民から長い間深く敬愛されていた国王で、私が渡航した頃は、まだほとんどのタイ人が黒い服を着たり喪章をつけたりし、街なかにも至る所に追悼の看板やポスターが掲げられていました。そんな悲しみに包まれた雰囲気も、12月に次の国王の即位式典が行われて以降、少しずつ変わり、もともとのタイらしい明るい「微笑みの国」の空気が戻ってきたところです。

ちょうど私が滞在した4ヶ月は、タイでは1年の中でも最も過ごしやすい乾季で、暑いとは言え日本の夏のような湿度はなく、むしろ屋内の冷房がどこも強くて上着が必須という状況でした。タイでは1年を通じて果物や野菜が豊

富に採れ、海や川にも恵まれているため魚介類も美味しく、タイ独特の香菜や唐辛子も含め私の味覚と体にマッチしていたようで、最後まで体調を崩すことなく元気に過ごすことができました。

さて、バンコクの教会事情ですが、タイは日本と同じく、あるいは日本以上に仏教の色が強い国ですので、教会の数はそう多くありません。日本語で礼拝を捧げられる教会はバンコクに2つあるようですが、私はバンコク日本語キリスト教会（BJCC）という超教派の教会に通っていました。昔経堂北教会におられた小田哲郎さんが居られ、長老の任務を担っていらっしやいます。中岡和彦先生、直美先生ご夫妻が牧会をされており、お二人とも力強く御言葉を語っておられました。礼拝出席者は小田さんご一家のように長年お住まいの方もいれば、会社の駐在で最近赴任してきた方々、自らタイに来て働いている若い女性たち、旅行中に立ち寄られた方や短期の出張者など、様々な世代、理由で集っていました。礼拝は超教派ということですが様々な賛美のスタ

イル（讚美歌、聖歌、ワーシツプ）を週ごとにとり入れていました。また、タイの地方や近隣の国で現地の方々に伝道や支援の活動を行っている方がバンコクを訪れ、BJCCの礼拝で報告をされるといいう機会も毎月のようにありました。教会学校が非常に充実しており、生徒やそこに関わる若い世代の受洗者が与えられていること、シラチャという日本人駐在員家庭の多い別の地域でも宣教活動を行っていることなど、豊かな伝道のわがが行われているのを知ることができました。

一方で、数年で日本に帰国されるメンバーが多く、教会を長期的

に中心となって支えることのできる方が少ないこと（今年は特に帰国の挨拶がありました）、タイで受洗したメンバーが日本に帰ってからしっかりと教会に繋がれるかどうかなど、祈りの課題も与えられています。住み慣れた地を離れ不安もある海外生活の中、自分の使い慣れた言葉で礼拝を守ることができるのはとても大きな恵みですし、信仰の支えとなります。ぜひみなさんも、海外で大事な働きをされているBJCCを覚え、お祈りいただきたいと思えます。

（上野陽子）

追悼

この教会に導いてくださった河原重恵さん

故・河原重恵姉

河原さんとは、成城の英会話等の講義で一緒に一緒にしました。彼女は83歳、一番小さく最高齢で明るく、白髪の綺麗な色白の方でした。私は1年間主人とロサンゼルスで過ごし、敬虔なクリスチャンに導かれ、帰国後教会を求めていました。英語クラスに戻ると、河原さんがお弁当の前に手を合わせて、そっとお祈りするのを見て、「あなたの教会に連れて行って」とお願いしました。当時私は礼拝に出席できなかつたので、水曜夜の祈禱会にお連れくださいました。相変わらず礼拝に出席できず、介護で疲れていると、「礼拝は神様の明るい光で心が温かくなるのよ。神様は知恵と力を沢山与えてくださるのよ」とよく仰いました。

そんな私の受洗を河原さんは殊の外喜んでくださいました。

小さな体で支えたご主人を見送られてから、ご息が転会されるという最高の喜びが待っていました。「毎朝主人に手を合わせに2階に上がって来てくれるの」とお喜びでした。ホームに入られてからは、毎日ご息様と奥様の訪問は欠かさず続き、お部屋の壁はご家族の写真と問安の櫛橋さんのカードで一杯。英会話の講師だったジャネットと何うと必ずご息様がおられ、「丘の上に立つ十字架」を歌い、主の祈りを力強く共に祈られるお元氣な96歳でした。

その後お目にかかれず、今年に入って河原さんが夢に出ました。岸先生から悲しいお知らせが入り、ジャネットと2人でお別れに教会に行きました。豊かな白髪と真っ白な美しいお姿で、今にも目を開けて「よくいらつしゃったわね」と微笑みかけられるようでした。十字架に向かう足には、神様の光がくつきりと差していました。寂しい思いのご家族、とりわけご息様の上に神様の豊かなお慰めをお祈りします。(高木悦子)

Book

「僕は、
そして僕たちは
どう生きるか」

著・梨木香歩
岩波現代文庫

中高生向けの本ですがタイトルが古めかしいのは、日中戦争時に反戦をテーマに書かれた吉野源三郎の「僕たちはどう生きるか」へのオマージュであるからです。主人公の名前も同じ「コペル君」です。主人公のコペル君は14歳。休日に、叔父に連れられ幼馴染のユージンの屋敷に行きます。屋敷の庭は、ユージンの祖母が伐採された森の植物を移植したため、うっそうとしています。ユージンは祖母亡き後、学校にも行かず一人で暮らしており、やがてこの森に何か潜んでいること、ユージンがなぜ学校に行かず、人の群れから離れたのが明らかになります。ユージンが小学生の時、かわいがっていた鶏を飼えなくなり、学校で飼ってもらうことになりましたが、熱血教師である担任は「命の授業」として鶏を屠殺すること

をクラスに提案しました。コペル君はユージンの気持ちを考えてたものの、皆が賛成するからいいやと思いい、ユージンも嫌と言えず、鶏を料理して食べ、深く傷つきました。教師のしたことは間違いないと言えません。けれど、「正論」をふりかざして少数を傷つけてよいのか? 「正論」「普通」という言葉に流されて少数の犠牲を無視してしまう弱さや狡さを突き付けられました。また、第二次大戦中に兵役拒否して洞窟にこもっていた人の話や、狡猾な大人に騙され傷ついた少女なども登場し、「群れ」の中でも声を上げることの大切さを考えさせられました。最近の政權では、あれよあれよと物事が決まっています。大義名分の威力に負けて、自ら進んで思考停止のスイッチを押ししていないでしょうか。自分の狡さに泣きそうになるコペル君に少女は言います。「泣いたらだめだ、考え続けられなくなるから」、「怒るときを逸したらだめだ」と。違和感を感じたら、そのままにせず明らかにすることが大事なのだと感じました。

(酒井由紀子)

牧師のメモ帳

「ボクはこの教会を愛している」。これは経堂北教会と書いた心のメモ帳に、赤線を引いているメモの一つです。赴任して間もない頃、教師会（教職会）で岸先生の口から出たこの一言は、後にも先にも、その時にしか聞くことができませんでした。しかし、それが、かえって真実味を際立てています。そして、この言葉を聞いたからこそ、この言葉の背後にある想いを感じ

たからこそ、私は3年間、経堂北教会の担任教師として職務を果たすことができたのだと思います。

「愛する」ということは、非常に奥が深いものです。いつも「愛している」と言えば、愛していることになるのかというと、必ずしもそうではありません。たとえ言葉にしなくても、微笑みかけたり、贈り物をしたり、抱きしめたりすることで、愛していると伝えられることがあります。また、言葉や行動にしなくても、深い愛に気づくこともあります。いや、そもそも

も愛していることを相手に伝えるべきかさえ迷ってしまいます。この世には、愛とは何かという定義がたくさんあります。ここで、そのどれが正しくて、どれが間違っているかと指摘をするつもりはありません。しかし、聖書は確かに神の愛を伝え、イエスさまこそ神の愛そのものであると言います。愛は神ではありません。けれども、神は愛です。その愛を伝えるため、私たちを罪から救うために、主イエス・キリストは十字架におかかりになりました。

は安心して葬儀に集中できます。費用のことが気になる場合は率直にお願いできます。葬儀社の競争は厳しいようですが、信仰と志によつて築かれた葬儀社とのお付き合いは、宣伝抜きで大切にしたいものです。

これまで私という一人の伝道者を通して、どれだけ主の愛を伝えられたでしょうか。上手に伝えることができたか自信はありませんが、主が必ず万事を益とさせていただきます。3年間、本当にお世話になりました。言われたことを忘れたり、思い付くまま伝道に出掛けたり、色々とご迷惑もおかけしましたが、私の時いた福音の種は、いつかどこかで芽生えると信じています。主なる神さまと経堂北教会に感謝を込めて、神の愛を込めて、また会う日まで。（上野峻二）

ト）は、「聖書のみ」「信仰のみ」の真理に立ち、御言葉に集中することによつて生かされてきました。天地は滅びても御言葉は滅びません。御言葉を食べて私たちは生きることができます。御言葉を大胆に宣べ伝えることが教会の使命です。

牧師の書斎から



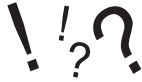
3月に入つてすぐ、河原重恵さんと石丸良明さんの葬儀が続きました。その直前には他の教会での葬儀に出席しましたから、1週のうち1日おきに葬儀でした。いずれも栄光式典社が担当しました。ご遺族、葬儀社との打合せもありましたから、葬儀社の担当者とは毎日顔を合わせました。長いこと（34年間）牧師をしているとこういうことを何度か経験します。

葬儀社の依頼はご遺族の意志を尊重します。紹介を依頼された場合だけ栄光式典社を紹介します。キリスト教葬儀社のなかった時代、霊南坂教会の会員が牧師に勧められて栄光式典社を始めました。初代から夫人、長男、次男と社長が引き継がれてきました。現場では3代目が働くようになりました。30年の付き合いですから、ウラのことはすっかり任せきりです。勝手知ったる教会のこと、準備も片付けも、何も指示しなくてもさきんとしてくれれます。こちら

葬儀後は教会総会と教区総会の準備に追われています。16年度の反省と評価、17年度計画の原案をそれぞれまとめました。いずれも宗教改革500周年がキーワードです。宗教改革によつて誕生した私たちが福音主義教会（プロテスタン

教勢減、財政逼迫の現実を正しく受け止め、それだからこそ、十字架と復活のキリストの福音から命と力を得て、共に終わりの日を目指して前進しましょう。私たちは福音を恥としません。（岸俊彦）

個人消息



長老のファイル

春は出会いと別れの季節です。人生は常に出会いと別れに満ちています。

3年間ご奉仕くださった上野牧師とご夫人の陽子さんがこの春、鎌倉雪ノ下教会へ赴任されるのにあたり、様々な引き継ぎがなされました。3月の最終主日には、礼拝後に先生ご夫妻の送別会も持たれました。

一方、2月末から3月初めには、

掲示板



- 棕櫚の主日礼拝 4月9日(日) 午前10:15
説教「隠れたる神」長山道東京神学大学准教授
- ◎受難週祈祷会
4月12日(水) 午前10:30・午後7:00
- ◎もより教会合同受難週礼拝
4月13日(木) 午後7:00 於 千歳船橋教会
説教「今日わたしと一緒に」
挽地茂男牧師(千歳丘教会)
- ◎受難日祈祷会 4月14日(金) 午後1:30
- ◎イースター墓前礼拝
4月16日(日) 午前7:30 於 教会墓地
- ◎イースター礼拝 4月16日(日) 午前10:15
説教「神の栄光」岸俊彦牧師 洗礼式 聖餐

編集後記



▽いよいよ創立80周年の年度に入りました。お互いに「祈りを合わせて」歩みましょう。(沢田)

「栄光」2017年4月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@mb.infoweb.ne.jp
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

短い間にご葬儀が過ぎました。

どんなに別れが寂しくても、その時は確実にやってきます。それはすべて神様がご準備くださったことと頭では理解していても、心は受け止めきれない場合が多いのが事実です。

事実をどのように受け止め、先に向かつて進むためにはどのような準備が必要なのでしょう。長老会でも各プログラムに対し十分な話し合いがなされ、祈りつつ新しい年度に向かってまいります。今まで教会で働きを担ってくださ

った先人を覚え、様々な行事を粛々と進めていきたいものです。

イースターの受洗者も与えられ、80周年に向かい新たな希望と未来に向かう確かな足元を神様に支えられていることに感謝です。宗教改革500周年でもある今年、経堂北教会はこれからも開拓精神を重んじ、伝道に励む教会として歩んで参りましょう。

まずは体調管理。季節の変わり目に負けることなく、体の準備からしていきましょう。

(牧内美和)